

生きた歴史と文学

校長 久保田範夫

今回は、約十年前に県南地区高校の図書館便りに書いたものを、ほぼそのまま掲載させていただきたい。ネタ切れということが第一の理由であるが、私の歴史、人間、文学についての基本的な考え方は変わっていないし、ここで紹介した本を、安積の後輩たちにも是非読破してほしいとの思いが強く、再掲したものである。

人間がこの宇宙から消滅すれば、歴史も消える。たとえ、膨大な歴史書が人間のいない宇宙に残されたとしても、また仮に、人間以外の知的生命体がその歴史書を解読したとしても、思い出す人間がいないのだから、それは歴史ではないということだ。人間が存在する限り、歴史は人間と共に在る。或る一人の人間が存在すれば、その家族や一族の歴史が在り、彼（彼女）が属している共同体の歴史が在り、彼が接し、記憶に刻みこまれた他民族や国家の歴史が在り、そして人類の歴史が在る。それは「思い出」、「文学」として叙述されたときに初めて、人間にとつての「生きた歴史」となるだろう。（ある評論家は、「歴史には死人だけしか現れて来ない。思い出が、僕らを一種の動物であることから救う。記憶するだけではだめで、心を虚しくして思い出さなくてはいけない」という趣旨のことを述べている。）

こんなことを考えたのは、今年（注：平成十五年）八月下旬、六万年ぶりに大接近した火星の赤く輝く姿を眺めたり、また、夏休みに毎年読むことにしているSF……今年はA・C・クラークの『3001年終局への旅』（映画化されたあの『2001年宇宙の旅』から始まるオデッセイ・シリーズの最終章）を読み、大宇宙に流れる時間と人間について思いを巡らせたこ

とが影響しているかも知れない。夜空に煌めく星々は、僕たちに様々なことを考えさせる。……原始地球は約四十六億年前に誕生し人類が現れて約四百万年が経過した、火星には水が存在した証拠は観測されているが生命が存在した証拠はない、肉体を失っても何千年にも亘って存在し続ける「意識」だけの存在、宇宙には始まりと終わりがあるのか等々……。

さて、僕にとつて「生きた歴史」とは何だろう。大学では、歴史学科の中でも珍しい「日本思想史学」を専攻し、日本人の心の歴史を学んだ。日本史と国文学や宗教学との境界領域において、主に古典文学を素材として日本人の宗教観や霊魂観、死生観を探ることはそれなりに興味深いものがあつた。しかし、編年体で書かれた『日本書紀』から続く六国史等の客観的歴史書には生きた歴史・日本人は感じられず、歴史上の人物が躍動しているのは紀伝体を採用『大鏡』等の「歴史物語」や、平曲として語られる過程で改訂増補されていた「軍記物語」の傑作『平家物語』等「文学」作品の中なのである。

先ほど「客観的」と言ったが、客観的事実を可能な限り記録・集積することは重要なことであり、それが「歴史の教訓」となり人類に同じ過ちを繰り返させないということもあるだろう。しかし、歴史を語り叙述する行為は、或る世界観や認識の体系に自ら与^{くみ}することであり、厳密には公正中立の立場などあり得ないはずである。『平家』の原作者は無常観と因果応報の仏教思想を底流に据えて、時に力強く時に哀調を帯びた七五調の韻文で平家一門の盛衰の歴史をまざまざと思い出しながら語ったのであり、だからこそ多くの人を感動させる日本文学の傑作たり得たのである。つまり、日本のそして世界の様々な民族の伝承と記憶を伝える「文学」の中にこそ「歴史」があるのだと言える。それは古典だけではなく、近現代文学の中にも生きた歴史・日本人が躍動する作品は紹介しきれないくらいあるのだ

が、特に高校生諸君が入手しやすく、また面白く読めるものを何冊か紹介するので是非ともチャレンジしてほしい。

○ 北 杜夫『楡家の人びと』（新潮文庫）

著者北杜夫の父は、あの大歌人斎藤茂吉であり、この作品は、茂吉ら斎藤家の人々の人生をモデルとした話である。

明治、大正、昭和にわたる物語の中で、楡病院とそれに関わる人々は、次第に戦争に飲み込まれていく。戦場の描写は、現代の私達にも今そこに飢餓の光景がまざまざと広がっているように感じさせてくれる。

なお、北杜夫とこの作品に大きな影響を与えたのがトーマス・マン『ブッデンブローク家の人びと』である。ドイツのリュューベクを舞台に、栄華を極めた商家が緩やかに、だが確実に没落への道を歩んでいく様を、四代に渡って描いた大河小説。マンは主にこの作品の作者としてノーベル文学賞を受賞した。

○ 辻 邦生『ある生涯の七つの場所全8巻』（中公文庫）

「霧の聖マリ」から「椎の木のはとり」まで、多くの短編が集まって一枚のタペストリーを織り成す壮大な小説。一人の人間の人生が、決して単線の物語ではあり得ないように、一つ一つの出来事が多角的に描かれる。懸命に生きる一人ひとりの人間がこの世界を構成していて、誰もが脇役ではないことを実感させてくれる。

○ 森 鷗外『渋江抽斎』（岩波文庫）

渋江抽斎（1805-58）は弘前の医官で考証学者であった。「武鑑」（大名や旗本の姓名や家系、住居、職務などをまとめた名鑑）収集の途上で抽斎

の名に遭遇し、心を惹かれた鷗外は、その交友関係、趣味、家庭生活、子孫に至るまでを克明に調べ、生きいきと描きだす。「私のコンタンポラン（同時代人）」と言い、自分と相通じた姿を見出した抽斎への熱い思いを淡々と記す鷗外の文章は見事である。鷗外史伝ものの最高傑作。

○ トルストイ『戦争と平和』（岩波文庫他）

十九世紀初頭、ナポレオンの侵入というロシアが経験した未曾有の危機の時代を、雄大なスケールで描破した世界文学の最高峰。「歴史をつくるのは少数の英雄や為政者などではない」……巨匠の筆は五百人を超す登場人物一人ひとりを個性豊かに描きだし、ここに歴史とロマンの一大交響楽が展開する。